原著論文

サービス・ラーニングとアントレプレナー教育を取り入れた高大連携プログラム
―「SAGE JAPAN」における社会貢献プロジェクトの教育効果―

創価大学　宮崎　猛
創価大学　桐山信一

本研究では、サービス・ラーニングとアントレプレナーシップ教育を取り入れた高大連携プログラムとしてSAGE JAPANを取り上げ、参加した高校生ならびにその活動を支援する大学生サポーターの教育効果について検証した。その結果、第一に社会貢献プロジェクトに主体的に関わることで社会人基礎力に関連した能力を身につけたとの認識がなされた。それは「社会貢献への関心」「発言力」（高校生、大学生）、「協調性」（大学生）、「責任感」「リーダーシップ」「問題解決能力」（高校生）で確認することができた。第二は高校生と大学生で異なった結果となった規準があったことである。具体的には、「責任感」「リーダーシップ」は高校生では活動前後の有意な向上がみられたものの、大学生では向上はみられたが有意差までは出なかった。「協調性」はその反対の結果となった。要因は、プロジェクトにおける高校生、大学生の役割が異なり、それぞれの役割を果たす過程で、それに必要な能力の必要性を強く感得したり、不足を内省したものと考えられた。本研究の限界は、一事例の少ない標本数に基づいて行われたものであり、高校生や大学生のアントレプレナー教育の効果として一般化することはできないことである。

Ⅰ　はじめに

現実社会を対象にした問題解決型学習は高校生にどのような教育効果をもつのだろうか。本研究は高校生を対象としたアントレプレナーシップ（起業家精神）育成プログラムの教育効果ならびに高校生をサポートしたりする大学生への教育効果を検証しようとするものである。アントレプレナーシップとは起業家としての資質や能力、意欲のことを意味するが、本研究で取り上げる教育プログラムSAGE JAPAN（セージ、Students for the Advancement of Global Entrepreneurship）は起業そのものの力量育成を目的とするのではなく、現実社会の問題を解決する過程で必要となる問題解決能力、社会貢献力、提案力、創造力、チャレンジ精神、イノベーション能力等の育成を目指している。

これまでのSAGE JAPANの取り組みの中で、高校生は国連アジェンダSDGs（持続可能な開発のための目標）と関連した多様な社会貢献プロジェクトを考案・実践してきた。また、プログラムにはサービス・ラーニングの教育方法（貢献活動と学習を統合させる学習方法）が取り入れられ、活動は大学生の支援を通して行われている。高校生の学びを中核として、それを支援する大学生の学びも企図されたプログラムになっている。SAGE（以下米国で立ち上げられたSAGEをSAGE JAPANと区別するためにSAGE Globalと表記する）は2002年に米国で

キーワード：サービス・ラーニング、アントレプレナー教育、高大連携、社会貢献プロジェクト、問題解決学習

立ち上げられ、日本ではSAGE JAPANとして2013年より実施されるようになった。

本研究はSAGE JAPANに参加している高校生ならびに大学生への調査をもとに、同プログラムの教育効果を明らかにすることを目的とする。それらを通して今後の日本の中等・高等教育におけるアントレプレナーシップ教育の可能性の一端を示していく。

Ⅱ　SAGE JAPANの取り組みの経緯とその特徴

1　SAGE JAPAN立ち上げまでの経緯

SAGE JAPANは第一著者の研究室（創価大学教育学部宮崎猛ゼミ）によって運営、実践されている。当該研究室は、米国を発祥とし、各国の教育方法として今日広く取り入れられているサービス・ラーニング（SL）を2006年度の研究室発足以降、研究・実践テーマとして取り上げてきた。サービス・ラーニングは経験主義による教育方法であり、現実社会における貢献活動を通して学びを構築しようとするもので（宮崎、1998）[1]、学生の学びが重視される教育実習やインターンシップ、また受け入れ先の受益が強調されるボランティアなどとは異なる性格をもつものである（Furco、1996）[2]。実践の鍵は、受け入れ先との対等性や互恵関係が重視されているところにある。当該研究室はその理論研究としてサービス・ラーニングにかかわる諸文献や、デューイ等の経験主義教育にかかわる文献の輪読を行うとともに、理論研究の実践への適用として、教育現場への社会貢献活動を行ってきた。SAGE JAPAN立ち上げ以前には、東京都公立高等学校に必修として導入された教科「奉仕」のカリキュラムをサービス・ラーニングの理論や方法を用いて開発し、いくつかの高校で実際に授業を担当するなどしてきた(宮崎、2013)[3]。

SAGE JAPANは2012年度に8名のゼミ生によって立ち上げられた。当該学生は、夏合宿等において何を理論適用の実践の場にするのかについて数度にわたる話し合いを行った。SAGEはその際に担当教員（第一著者）によって情報提供されたもので、いくつかの候補の一つであった。立ち上げを決めた経緯について、代表を務めた学生は卒業時のレポートに以下のように記している。

> 自分たちが何をするのかを決めるために3グループに分かれ、自分たちで社会問題を解決するための事業案を考え、プレゼンしたこともありました。その結果、私たちのしたいことが社会貢献という漠然なものから、今の若者に不足している批判的思考力や問題解決能力等を持ち、よりよい社会を創っていける青年を育成していくことが、私たちのしたい社会貢献であり、それがSAGEで実現できるのではないかという考えから、私たちはSAGEに取り組むことを決めました。

教育学部の学生としての強みを活かせる社会貢献は、社会貢献のための人材を育成することであったと振り返っている。

SAGE JAPANの立ち上げに先だって、当該学生らはその意義を確認するために学内で大規模な質問紙調査を行った（有効回答数358名）。その結果、以下が明らかになった。

1 学生は社会貢献に対して高い意識を持っている
2 社会貢献への関心はあるものの行動できていない
3 自己肯定感や自己有用感が低い

こうした調査結果を踏まえ、高校生の社会貢献を支えるSAGE JAPAの活動は、大学生に対して社会貢献の実践の場を提供し、そのことを通して自己肯定感や自己有用感を涵養する機

会を提供することになるのではないかと期待された。同時にSAGEは高校生に対しても同様の機会を提供することになるものと考えたのである。この調査は創価大学学生を対象にしたものであったが、その後内閣府によって行われた「子ども・若者白書」（内閣府、2014年）[4]の調査でも同様の内容を含む報告が行われている。同白書では統計資料の分析から「日本のために何らか役に立ちたいのだけれども、具体的にどのように関与できるのか、また、自らの社会参加により具体的に社会を変えられるのかについては確たる意識を持つことができていない」と述べている。

2　SAGE GlobalとSAGE JAPAN

SAGE Globalは2002年、カリフォルニア州立大学Curtis DeBerg教授らによって設立され、参加地域は北米、南米、アジア、ヨーロッパ、アフリカ等に広がり、2018年にはこのプログラムに21カ国約12000人の高校生が参加している（Handbook、2018-2019）[5]。毎年夏に各国の代表が集い開催される世界大会は国家間の政治的な係争を超えた高校生の国際友好の場ともなっている。高校生が考案するプロジェクトにはSEB（Social Enterprise Business= 社会問題の解決を目的としたビジネス）とSRB（Socially Responsible Business= 社会貢献を踏まえた利益目的のビジネス）の二つのカテゴリーがあり、SEBは社会貢献プロジェクト、SRBは環境等の社会的責任に配慮したビジネスプロジェクトと位置づけられる。それぞれのカテゴリー毎に優秀賞等が決められるが、いずれのカテゴリーにおいても国連アジェンダSDGsを意識したプロジェクトが重要であるとされる（Handbook、2018-2019）。

SAGE JAPANを立ち上げるにあたっては、SAGE Globalがもつ教育的側面や社会貢献に焦点化したプログラムとすることが確認された。そこでSAGE JAPANではSEB（社会貢献プロジェクト）に特化した活動を行うこととなった。また、理論研究から導かれる教育的要素として、1.活動前に個人ならびにチームでそれぞれの目標を設定すること、2.活動中にその都度振り返りを行うこと、3.将来に向けてプログラムの経験が活かされるよう活動後の振り返りを構造的に行うこと、4.大会の勝敗に過度に拘泥しないように配慮するとともに、プロセスでの学びを重視した教育プログラムとすること等が確認された。理論と実践に関して前述の学生は次のように述べている。

> “考えて動いて壁にぶつかってまた考えて”、という繰り返しだったような気がします。これはゼミで学んだ“理論と経験の往復”の大切さを体感したことでもあると思っています。実社会の中で動いてみて始めて分かる理論の大切さ。その大切さが分かってから学ぶ理論は、一味違い、また自分の理解力にも影響していました。

次にSAGE JAPANの仕組みを概説する。SAGE JAPAN（http://SAGE JAPAN.jp/）は高大連携のプログラムとなっており、図１にあるように、中心となるのは高校生によるプロジェクトである。高校生は「飢餓とフードロスの問題を改善するためのフードドライブ料理教室の開催」「性的マイノリティといった個性の表現の自由化を目的としたユニバーサルデザインのリボンタイの開発」「空港に放置されていくスーツケース問題を解決する服シェアリング」（2019年度大会）などSDGsに関連したユニー

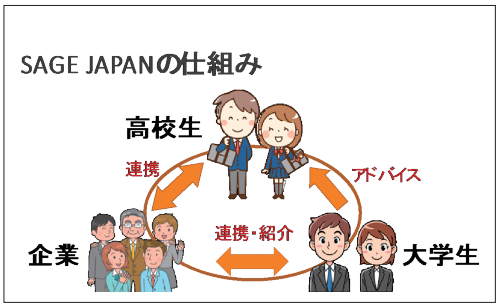

図１　SAGE JAPANの仕組み

クなプロジェクトを考案・実践してきた。こうした高校生の活動を全面的に支援するのが大学生サポーターである。

大学生サポーターは高校生のメンターとなって、高校生の主体性を尊重しつつ、プロジェクトの立ち上げから実践までを支援する。その過程で企業人の協力を得ることになる。企業やNPOで活躍している人々は高校生や大学生サポーターの求めに応じて、個別相談や講演会等において参画することになる。SAGE JAPANは高校生を中核に据えた持続可能な社会構築を目指したコミュニティということができる。大学生サポーターの募集や研修、高校生チームの募集、大会の企画運営等は当該研究室学生によって行われ、担当教員（第一著者）は運営学生のアドバイザーならびに最終責任者として役割を担っている。

初年度は2チームから始まったものの2年目には5チームが参加し東京都教育委員会等からの後援名義を取得するなどした。3年目は優勝チームの世界大会への派遣、4年目は複数の大学とのコラボレーション、5年目はワークブック作成によるプロジェクトの質向上、6年目は外部会場での実施や他大学（文京学院大学）との共催など毎年発展してきている。

運営にあたる学生の研究室への所属は3年次・4年次の2年間となるため、毎年学生は入れ替わることになる。SAGE JAPANの運営は引き継ぎを繰り返しながら以下のような経過を辿ってきた。

2012年9月　SAGE JAPAN創設決定
2013年4月　SAGE JAPAN活動開始
2014年3月　第1回大会　2チーム出場
2014年8月　世界大会（モスクワ）視察、学生等4名参加
2015年3月　第2回大会　6チーム出場
　　東京都教育委員会、毎日新聞より後援名義取得、ホームページ創設
2016年3月　第3回大会　6チーム出場
2016年8月　世界大会（フィリピン）都立両国高校出場
2017年3月　第4回大会開催　6チーム出場
2017年8月　世界大会（ウクライナ）横浜サイエンス・フロンティア高校出場
2018年3月　第5回大会開催7チーム出場
　　SAGE Global　CEOカリフォルニア州立大学Curtis DeBerg教授来日
2018年8月　世界大会（南アフリカ）都立国際高校出場
2019年3月　第6回大会開催7チーム出場
2019年8月　世界大会（サンフランシスコ）都立国際高校出場
2020年3月　第7回大会　コロナウイルスにより会場での大会中止
2020年7月　第7回大会オンライン大会実施
2020年8月　世界大会（オンライン）都立国際高校、都立千早高校出場
2021年3月　第8回大会オンライン大会実施
2021年8月　世界大会（オンライン）都立千早高校、都立両国高校出場

本研究での対象となった参加高校生は第8回大会に参加した6校11チーム（活動期間2020年9月～2021年度3月）で、授業時間枠以外での活動として行われた。各チームは3名～7名の高校生で構成されている。高校生のサポートは当該研究室の学生の呼びかけによって集まった創価大、文京学院大の学生、ならびに創価大学の運営学生一部が加わり行われた。第8回大会に向けた活動では新型コロナ感染が拡大し、高校生の活動にも制約が生じるなか、環境、資源問題を基軸に幅広いテーマの活動が提案・実施された。テーマは、「プラスチック廃材のスクー

ルソックスへの再生」、「レシートを例に感熱紙リサイクルから使い捨て文化の見直し」、「廃棄ビニール傘再利用」、「江戸時代レシピを参考にフードロス解消」、「猫犬殺処分の現状と取り組み」などであった。

3　アントレプレナーとサービス・ラーニングの教育効果

上述の特徴をもつSAGE JAPANは図２のような入れ子構造をもつプログラムである。高校生は地域・社会貢献プロジェクトを立案・実践することによってアントレプレナー（起業家）に関わる資質を身につけられるものと考えられ、それを支援する大学生サポーターや運営する大学生にはサービス・ラーニングやアントレプレナーにかかわる教育効果があるものと想定される。

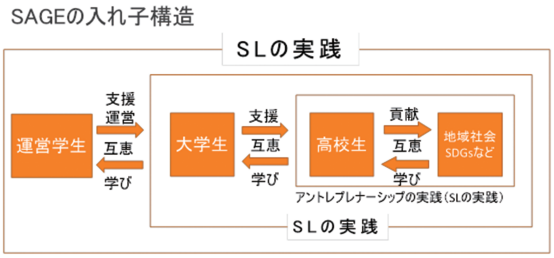

図２　SAGE JAPANの入れ子構造

経済産業省は起業家教育について、次の３つの力を育成するものであると説明している（経済産業省、2005）[6]。

１起業家マインド（起業家精神、アントレプレナーシップ）を育む教育
　・チャレンジ精神（新たなことや眼前の新たな課題に挑む気概）
　・志（やる気・動機）、情熱
　・リスクを恐れない勇気など
２起業家的能力を身につける教育
　・想像力、創造力、課題発見力、ポジティブ思考
　・コミュニケーション力、論理的思考力、表現・プレゼンテーション力
　・情報収集力、問題解決力、企画力、行動力、決断力など
３起業家的スキルを身につける教育
　・経済活動（実社会）のしくみ・考え方の理解
　・ビジネス、商売体験
　・ビジネス実務知識（起業に必要となる知識）

上記３つの項目のうち、「３起業家的スキル」は実際の起業に必要な知識やスキル育成の教育といえ、「１起業家マインドを育む教育」「２起業家的能力を身につける教育」は、問題解決にかかわる諸能力育成を目指すものということができる。教育としてのアントレプレナーシップは、起業家養成の教育であるというより、より幅広く捉えられており、問題解決を中核として、そのための意欲や必要な諸能力の育成が強調されている。小中学校でのアントレプレナー教育を実践してきた上西（2006）はその最終的な目標は「自己発見」「自己開発」であるとした上で、創造力、イニシアティブ、チャレンジ精神、コミュニケーション力、決断力、判断力、問題解決能力、チームワーク力といった技能を授業で使いながら培っていくものであると述べている[7]。川名（2014）は「起業教育」と「起業家学習」の違いに言及し、起業教育は「起業や事業に必要な経済・経営に関する専門的知識にプラスして業種・分野に特化したスキル」であるとし、それらは学校教育等で比較的容易に伝達が可能であるとしている[8]。一方、起業家学習は「リーダーシップや人的ネットワーク形成力、問題発見力、意思決定等」であるとして生育暦や経験から形成される傾向をもつものであるとする。SAGEの取組は川名が述べる「起

業家学習」に近いものであり、机上の学習だけで学ぶことは難しい諸能力を経験しながら身につけるものであるということができよう。

サービス・ラーニングは高等教育中心に世界各国に広がっており、わが国でも2000年以降、政府の施策もあり、いくつかの大学で専門機関を設置するなどして導入が図られてきた。その教育効果も米国を中心に多方面から検証されている。サービス・ラーニングは、地域での貢献活動を要件としていることから、特に市民性の育成に有効であるとされている。Battistoni（2013）は「サービス・ラーニングの経験は市民としてのアイデンティティを強化することができる」としており[9]、Boyte（2008）らは「市民としてのアイデンティティは一度刺激されると、行動への動機付けとなり、そこでは知識や技能、態度を必然的に伴うことになる」などの研究成果を公表している[10]。また、サービス・ラーニングは実践的指導力や社会性が求められる教員養成にも適しているとされる。Root and Anderson（2010）は教員養成課程に関わる25の研究を分析している[11]。それによると教員養成へのサービス・ラーニングの導入は 1. アカデミックな学習の促進 2. 生徒理解や生徒への気配り 3. 教授にかかわる知識や技能 4. 多様性への理解や受け入れ 5. サービス・ラーニングを担当するための動機や知識、技能に効果があったとされている。

第一著者ら（宮崎、Anderson, 2017）は、 本研究に先立つ2017年に、SAGE JAPAN を運営している大学生（宮崎ゼミ所属学生） を対象に CASQ（Civic Attitudes and Skills Questionnaire）を用いて、SAGE JAPAN 活動実施前後の変容の有無を調べるための調査を行った[12]。また、その際に振り返り等のデータも取得し、これらの分析（量的と質的）を行った。CASQ は、チューレーン大学の Moely（2002）らによって開発されたもので、市民性の効果測定尺度として英語圏以外でも使用されている[13]。第一著者らはこれを多段階法を用いて日本語に翻訳した。その内容は以下の 6 つの要素からなっている。

1. シビックアクション（コミュニティの将来への関与意志）
2. 対人との問題解決能力
3. 政治意識
4. リーダーシップスキル
5. 社会正義への態度
6. 多様性への態度（多様な背景や人種、宗教などが異なる人との関係）

調査の結果、「1. シビックアクション」「3. 政治意識」が実施後に有意に高くなり、「4. リーダーシップスキル」が有意に低くなるという結果を得た。リーダーシップスキル低下については、CASQ におけるリーダーシップスキルの因子が主に指示型のリーダーシップであったことが要因であると推定された。質的な分析からは、大学生同士が互いに支え合いながらプログラムを成功に導いていくことで支援型のリーダーシップ（サーバントリーダーシップ）が醸成されていったことが示唆された。

（宮崎　猛）

Ⅲ　検証方法

1　評価規準と質問項目の作成

以上の先行研究を踏まえ、今次の研究では SAGE JAPAN の取り組みにおける実践主体者としての高校生および実践支援者としての大学生サポーターに対する教育効果を検証することと

した。検証方法としては質問紙法を用いた。SAGE JAPAN の参加者は、複数の質問項目による自己評価を行い、その結果を筆者が分析して SAGE JAPAN の活動の教育的効果を判断するというものである。自己評価における質問項目は、評価規準を決めてそれをもとに作られた。規準と質問項目の作成については、経済産業省が提唱する社会人基礎力（経済産業省、2018）[14]における諸要素を参照しつつ、実践支援者である大学生サポーターに聞き取りを行って試作するという方法によった。

社会人基礎力を参照した理由は、市民としての基礎的資質や現代社会に求められる問題解決の諸能力を提示しているとして産業界、教育界等各方面から幅広く参照されており、その内容も社会の問題の改善を図っていこうとするアントレプレナーシップ教育ならびにサービス・ラーニングと共通するところがあると判断されたからである。なお、規準の作成においては、高等学校学習指導要領（平成30年）における評価の３観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」も合わせて参照し、情意面と能力面の二つに分けた。情意面は、３観点のうち「主体的に学習に取り組む態度」に相当するもので、能力面は「知識・技能」「思考・判断・表現」に相当するものである。本研究では情意にかかわる規準をメンタル面、能力にかかわる規準をスキル面とよぶ。メンタル面は、「１社会貢献への関心」「２チャレンジ精神」「３向上心」「４責任感」「５社会問題の関心」の５つの規準、スキル面は、「６リーダーシップ」「７発言力」「８創造力」「９協調性」「10問題解決能力」の５つの規準とし、計10規準について調査を行うことにした。各規準には２つの質問項目を入れて回答の平滑化をはかった。この10規準20質問項目の自己評価を、SAGE JAPAN の教育効果を判断するための評価規準と見なした（図３）。

参加者は、図３の自己評価を活動開始時と活動後（大会終了後）にそれぞれ行うことになる。また、質問項目の他に、数値ではとらえられない参加者の思いや体験を通した変容の有無などを調べるために、活動前および活動後に自由記述による質問を実施した。ここでは、分析に利用した活動後の３項目を示す（大学生、高校生共通）。

A）SAGE JAPAN の活動を通して身に付けたことや“自分は変わった”と思えるところがあれば書いてください

B）SAGE JAPAN の活動を通して自分の進路や将来に影響したと思えるところがあれば書いてください

C）実際に SAGE JAPAN の活動を体験してみて、今それをどのように振り返りますか。自由に記述して下さい。

メンタル面

１ 社会貢献への関心：社会問題に対して貢献しよう、またはしたいという意欲

①地域・社会をよりよくしたいと思う。

②地域・社会に対して自分にできることは何かを考えることがある。

２ チャレンジ精神：困難に負けず、積極的に新しいことに取り組んでいこうとする意欲

③新しいことに挑戦することが好き。

④挑戦することによって何かを学んだり、自分を成長させたりすることができると思う。

３ 向上心：より高いものを目指して努力しようとするとする姿勢

⑤困難に直面してもうまくやっていけると思う。

⑥現在やっていることは将来の自分に役立つと思う。

４ 責任感：自分の行動、人との関わりにおける責任感

⑦身近な問題や物事を自分たちの問題として考える。

⑧目標を立て最後までやり抜こうとする。
5 社会問題への関心：日本の社会や世界の問題について知っている、または知ろうとする意欲
⑨今後の日本社会や世界の動向が気になる。
⑩日本社会の抱える課題について考える。
スキル面
6 リーダーシップ：チームをまとめ、リードする力がある
⑪チームのメンバーや意見をまとめることができる。
⑫チームを引っ張っていくことができる。
7 発言力：自分の考えや意見をみんなに伝わりやすいよう発信することができる
⑬自分の考えや意見をためらうことなく発言することができる。
⑭相手に伝わりやすいように発言することができる。
8 創造力：物事に対して前向きに、また多角度からとらえることができる
⑮物事に対して前向きに捉えることができる。
⑯物事をいろいろな角度から見ることができる。
9 協調性：仲間の意見や性格を尊重し、チームとして一つの目標に向かって行動できる
⑰仲間を尊重し、皆で一つの目標を目指すことができる。
⑱仲間の意見を聞き、受け入れることができる。
10 問題解決能力：物事に問題意識を持ち、その解決に向けて行動できる
⑲問題を認識し、その問題の原因を追究することができる。
⑳身の回りの問題について、解決方法を模索し、行動することができる。

図３　SAGE JAPAN 参加者対象の評価規準（高校生、大学生共通）

２　調査対象と方法

2020年度における SAGE JAPAN の活動参加者（大学生サポーターと高校生）を対象に、図３に示された20質問項目については［１：いいえ、２：どちらかというといいえ、３：わからない、４：どちらかというとはい、５：はい］の５件法で回答を求めた。また、同時に上記に示した自由記述による質問を実施した。参加者は手渡されるワークブックに回答し、それを Google form に転記させた。分析の対象は活動前、活動後の両方に記載をした参加者である。

活動前記入：大学生サポーター21名、高校生 44名
活動後入力：大学生サポーター15名、高校生41名
活動前後とも記入・入力：N（大学生）＝11、N（高校生）＝31
　大学生：２年生　４名　３年生　４名　４年生　３名
　高校生：１年生　18名　２年生　13名
活動前は2020年10月～11月、活動後は2021年３月～４月に入力・記入

３　結果

⑴　各小規準の活動前後の平均値の比較

はじめに、各小規準の活動前後の平均値の変化を図４に示す。２つの特徴が認められる。活動前後ともに記入されたデータは、大学生11名（N＝11）、高校生31名（N＝31）であった。

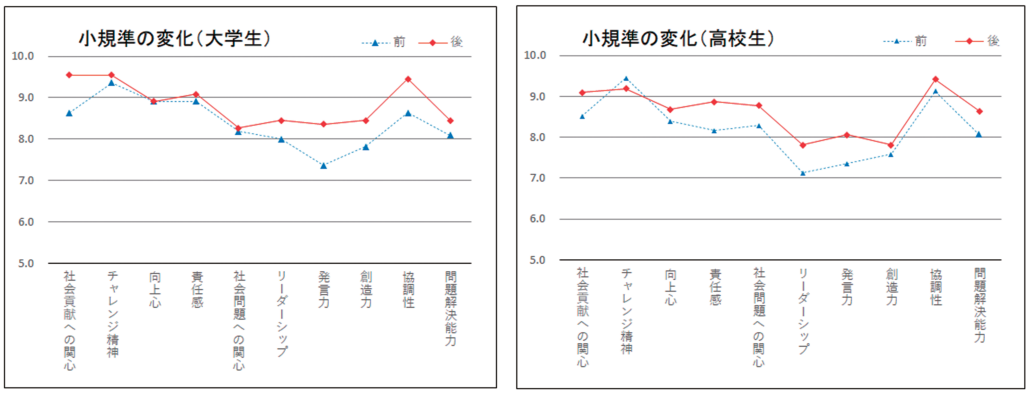

図４　各小規準の活動前後の平均値

特徴１：高校生の「チャレンジ精神」、大学生の「向上心」以外は、活動後は平均値がすべて上昇している。

特徴２：高校生ではスキル面の２つの小規準で上昇がほとんど無く（創造力、協調性）、大学生ではメンタル面の４つの小規準で上昇がほとんど無い（チャレンジ精神、向上心、責任感、社会問題への関心）。

⑵　活動前後の比較

平均値の変化が統計的に意味のある数値かどうかを関連２群のｔ検定を用いて調べた。以下、2020年度の結果を示す。

①大学生

活動前後のそれぞれの記述統計（平均値±標準偏差）、検定結果（ｔ値、ｐ値）を表１に示す。表１で、スキル面合計では活動前後に有意な向上が認められたが、メンタル面合計では認められなかった。また、３つの小規準で活動前後に有意な向上が認められたが（社会貢献への関心、発言力、協調性）、７つの小規準では認められなかった（チャレンジ精神、向上心、責任感、社会問題への関心、リーダーシップ、創造力、問題解決能力）。

②高校生

大学生と同様に、活動前後のそれぞれの記述統計（平均値±標準偏差）、検定結果（関連２群のｔ検定におけるｔ値、ｐ値）を表２に示す。表２で、スキル面合計、メンタル面合計で活動前後に有意な向上が認められた。また、３つの小規準で活動前後に有意な向上が認められ（社会貢献への関心、責任感、リーダーシップ）、２つの小規準で活動前後の向上に有意傾向が認められた（発言力、問題解決能力）。そして、５つの小規準では認められなかった（チャレンジ精神、向上心、社会問題への関心、創造力、協調性）。

表１ 大学生結果（N ＝ 11）

小規準	活動前	活動後	検定結果
社会貢献への関心	8.64±1.21	9.55±0.82	t＝2.89, p＜.05
チャレンジ精神	9.36±0.81	9.55±0.69	t＝0.69, n.s.
向上心	8.91±0.83	8.91±1.14	t＝***, n.s.
責任感	8.91±1.14	9.09±1.04	t＝0.48, n.s.
社会問題への関心	8.18±1.66	8.27±1.27	t＝0.20, n.s.
リーダーシップ	8.00±1.67	8.45±1.21	t＝1.17, n.s.
発言力	7.36±1.57	8.36±1.43	t＝2.47, p＜.05
創造力	7.82±1.33	8.45±1.57	t＝1.75, n.s.
協調性	8.64±1.29	9.45±0.82	t＝3.11, p＜.05
問題解決能力	8.09±1.38	8.45±1.57	t＝1.17, n.s.
メンタル面合計	44.00±4.17	45.36±3.41	t＝1.25, n.s.
スキル面合計	39.91±4.35	43.18±4.40	t＝4.04, p＜.01

表２ 高校生結果（N ＝ 31）

小規準	実施前	実施後	検定結果
社会貢献への関心	8.52±1.39	9.10±1.17	t＝2.26, p＜.05
チャレンジ精神	9.45±0.72	9.19±0.95	t＝-1.39, n.s.
向上心	8.39±0.96	8.68±0.98	t＝1.61, n.s.
責任感	8.16±1.66	8.87±1.28	t＝2.65, p＜.05
社会問題への関心	8.29±2.02	8.77±1.63	t＝1.65, n.s.
リーダーシップ	7.13±1.78	7.81±1.85	t＝2.33, p＜.05
発言力	7.35±1.72	8.06±1.29	t＝1.93, n.s.　p=0.06
創造力	7.58±1.26	7.81±1.45	t＝0.91, n.s.
協調性	9.13±1.31	9.42±1.29	t＝1.09, n.s.
問題解決能力	8.06±1.50	8.65±1.45	t＝1.76, n.s.　p=0.09
メンタル面合計	42.8±4.88	44.6±4.14	t＝3.10, p＜.01
スキル面合計	39.3±4.23	41.7±4.23	t＝3.15, p＜.01

（桐山信一）

⑶　自由記述の分析から

活動前後の数値の変化だけではわからない活動における事象の状況を、活動後の自由記述から探ることにした。表３に大学生11名の自由記述を示す。11名のうち、大学生サポーターのみを担当した者は９名、運営を兼ねた者は２名である。A、B、C は活動後の質問項目である。本研究では自由記述のサンプル数が少なく記述量も少ないため、データの原文ママを示した（明らかな誤字は修正している）。原文ママで示すことで引用個所の文脈における位置づけなどが自然と明らかになり、事象の状況に対する分析や解釈の妥当性を検証可能にするものと考える。

①大学生

表３ 大学生の自由記述

	A SAGEの活動を通して身に付けたことや“自分は変わった”と思えるところがあれば書いてください	B SAGEの活動を通して自分の進路や将来に影響したと思えるところがあれば書いてください	C 実際にSAGEの活動を体験してみて、今それをどのように振り返りますか。自由に記述して下さい
1	サポートする上で自分の意見を言うことができるようになったと思います。今までは遠慮して言えなかったことも、相手に配慮しながら言えるようになったのではないかと思います。	自分の進路は変わらず教員を目指していきたいと思っています。しかし、授業をしていく上で社会問題について取り扱う機会を増やそうと思いました。社会科の教師を目指しているので十分可能なのではないかと思っていま	自分が思っていることを正直に伝えられるようになったと思うのは前述の通りです。しかし、このプロジェクトのビジョンや発表に対してのイメージを本番当日までに確立できなかったことに悔いはあります。
2	身に付いたこととしては、視野を広げて考えること。物事の進め方を状況に応じて工夫することです。変わったと思えることとしては、肯定的な意見だけでなく、第三者視点に立ち、客観視ができるようになったということです。	教育を知識だけでなく、実際に社会的問題と照らして考え、教育の質を上げるためにできる工夫や問題解決のためにどのような実践ができるかといった、教育を取り組む前提で考えるということをSAGE JAPANを通して学びました。将来、教師になる上で、実践を行うことを想定しながら物事を進めていくことが求められるため、将来の力になると感じました。	非常に良い機会だったと思います。高校生という自分達とは違う立場からの考えや、まとめていく能力、そしてなによりも高校生と大学生、また学生同士の信頼を築くことができた場であると思います。互いをよく知れたことで、毎回のミーティングにも楽しみを感じ、より良いアイデアを高校生や同期の学生と共に考える時間がとても有意義でした。SAGEで培った力を今度は社会に出た際に発揮できる力として行きたいと思います。
3	どのようにしてチームビルディングを進めていくかについての意識が変わりました。高校生同士が初対面だったり仲が深められてなかったりしたので、賞賛をしあったり、それぞれの発言に対して対話の時間を設け、価値観の背後にある経験を共有させました。	高等学校英語科教員を目指していますが、総合的な探求の学習の指導に活かしていきたいです。高校生が社会課題ついてプロジェクトベースで考えるというのはデューイのプロジェクト学習に通じるものがありますが、それを実践していく足場掛けになりました。	高校生への連絡はもちろん、大学生サポーターや運営側とも報告、連絡、相談を密に取るということが、組織として動くときに必要であるなと感じさせられました。また高校生とのミーティングではオンラインという環境でありましたが、Googleの機能を最大限に利用しKJ法などを実施した経験は、新たな学びをどのように進めるかについて考えるきっかけにもなった。
4	高校生から見た社会や自分にはない視点があり、それを活かしたいと思えたこと。	誰かが一生懸命頑張る姿を側で支えたいし目標に向かって自分も共に頑張りたい。	もっと関わり方やアドバイスの仕方を変えてれば世界大会へ出場できてたのかなと思うと申し訳ないです。力不足を実感してます。
5	スケジュールを管理してペアの人や高校生を信じることを意識するようになった	企業という視点から社会に貢献できることの素晴らしさを感じた。	途中で自分の優先順位が変わってしまい、大変だと感じる時もあったが、最後に高校生が何より楽しそうに活動できていた様子が見られたのと、私たち大サポのことも認識して感謝の言葉を伝えてくれたのが嬉しかった。
6	改めてチームビルディングの難しさを実感しました。どのように高校生をやる気にさせるのか？や、少ないミーティング時間の中でどれだけ密度の濃いことをできるかなど、深く考えるいい機会になりました！		直接自分が関わって研究やプロジェクト立案をするよりもチームを導いてあげることの大変さから学びを得ることができました。
7	自分で研究するのとは違い、第三者目線でやるべきとこを考えられるので、問題点に気づきやすくなりました。	進路に影響したというところはないです。	自分たちで研究するとしたら、気づけない発見や意見を見つけることが出来、今後のゼミの研究に大いに生かせるのではないかと思います。
8	相手に分かりやすく説明する能力が身につきました。大学生なら分かるという考え方をなくし、高校生に限らず初めてその話を聞く人にいかにやってほしいことや自分の考えを伝えられるか、そこが大変でしたが、とても力が身につきました。	高校生のプレゼンをみて、自分の研究を見直すきっかけとなり影響がありました。高校生のプレゼンを先日みて話が唐突であったり、どこをメインに話すかなど客観的にみることで様々な課題点がみつかり、自分のゼミの研究におけるプレゼン発表の際にも気をつけなければならない点であると感じました。	もう少し高校生のサポートを自分ができたら、最終プレゼンももう少し完成度の高いものになったのではないかと後悔しています。パワポを前日にしか確認できなかったため、本番まで時間がなかったので直してほしいところも一部しか指摘できませんでした。次のSAGEへ参加する方に引継ぎをする際は、自分たちのこの前にならないよう助言をしたいと思います。約半年間ありがとうございました。
9	他人に何かを伝えたり教えたりすることで、自分自身の学びに繋がることを実感した。また、自ら率先して行動できるようになった。	自分自身が、誰かのサポートや助けになることに喜びを覚える人間だと気づかことができた。そのため、将来は人の為になるような仕事をしてみたいと考えるようになった。	私事と学業とSAGEの活動を両立するのはとても大変だった。でも、それを乗り越えた今、メールの文章作成や人とのコミュニケーションなど成長できた部分が多く、とても有意義な時間だったと感じている。
10	社会問題に日頃からアンテナを張り、関心を持つようになった。ビジネスマナーやスキルが身についた。	社会に貢献したい、人々の幸福のために働きたい、という気持ちが強くなりました。	
11	アレンジメント能力とリーダーシップ	やり抜く根性と力、考える力、チームワークなどの能力を身につけることができました。	SAGE　JAPANは高校生が社会問題に対して貢献プロジェクトを考案、実際する教育プログラムである。高校生、大学生、企業が三社連携の仕組みになっているからこそ、高校生のプロジェクトが成功できる。また高校生と大学生がミーティングを通してお互いに影響し、相互学習することができる。

＊大学生サポーターと運営を兼ねていた大学生は10と11

＊下線は引用した記述

自由記述には有意な向上がみられた「発言力」、「協調性」に関連する記述があった。それらとともに有意差がみられなかった項目に関連する記述を取り上げる。

a)「発言力」に関する記述から

「サポートする上で自分の意見を言うことができるようになったと思います。今までは遠慮して言えなかったことも、相手に配慮しながら言えるようになったのではないかと思います。」(1A)
「相手に分かりやすく説明する能力が身につきました。大学生なら分かるという考え方をなくし、高校生に限らず初めてその話を聞く人にいかにやってほしいことや自分の考えを伝えられるか，そこが大変でしたが，とても力が身につきました。」(8A)
「他人に何かを伝えたり教えたりすることで、自分自身の学びに繋がることを実感した。また、自ら率先して行動できるようになった。」(9A)

高校生のサポートに携わったことで「自分の意見」を表出することへの躊躇がなくなり、「相手に配慮」した意見が述べられるようになったとの自己認識がみられた（1A)。相手への配慮とは、高校生に対して「分かりやすく説明する」「大学生なら分かるという考え方をなくす」ということであり、そうした機会を通して「分かりやすく説明する能力」や「やってほしいことや自分の考えを伝える」力が身に付いたと捉えている（8A)。また、「他人に何かを伝えたり教えたりすること」が学びになったとして、その具体として「自ら率先して行動できるようになった」との変容の姿が示されている（9A)。

高校生へのサポートでは大学生サポーターの発言は不可避であり、その機会を通して発言力の評価規準である「自分の意見や考えを相手に伝わりやすいよう発信することができる」の向上を自覚したものと考えれば、上述の記述は量的分析における有意差の存在と符合するものといえる。

b)「協調性」に関する記述から

「身に付いたこととしては、視野を広げて考えること、・・・肯定的な意見だけでなく、第三者視点に立ち、客観視ができるようになった」(2A)
「高校生という自分達とは違う立場からの考えや、まとめていく能力、そしてなによりも高校生と大学生、また学生同士の信頼を築くことができた場であると思います」(2C)
「相手に分かりやすく説明する能力が身につきました。大学生なら分かるという考え方をなくし、高校生に限らず初めてその話を聞く人にいかにやってほしいことや自分の考えを伝えられるか、そこが大変でしたが、とても力が身につきました。」(8A 前出)

「視野を広げて考えること」「客観視できるようになった」との記述からは、多様な意見や考えをもとに自らの考えを相対化する態度の必要性を自覚したものととらえることができ、関連して「高校生という自分達とは違う立場からの考えや、まとめていく能力」も求められており、結果として「高校生と大学生、また学生同士の信頼」が醸成された（2A2C）と考えられる。「相手に分かりやすく説明する能力」「大学生なら分かるという考え方をなくし・・・自分の考えを伝える」との記述からは、発言力と協調性には連関があることが示唆される（8A)。

大学生サポーターが高校生の自律性に配慮しながら支援することが協調性の発露となり、「協調性」の評価規準である「仲間の意見や性格を尊重し、チームとして目標をとして一つの目標に向かって行動できる」に貢献したものと考えられる。そして、「協調性」を前提としたコミュニケーションに取り組むことで、相手に受容される「発言力」を身につけていったもの

と解釈できる。

c）有意な向上がみられなかった小規準に関する記述から

関連する記述として「責任感」、「リーダーシップ」に関わる記述がみられた。

「このプロジェクトのビジョンや発表に対してのイメージを本番当日までに確立できなかったことに悔いはあります。」（１C）
「もっと関わり方やアドバイスの仕方を変えてれば世界大会へ出場できていたのかなと思うと申し訳ないです。力不足を実感しています。」（４C）
「もう少し高校生のサポートを自分ができたら、最終プレゼンももう少し完成度の高いものになったのではないかと後悔しています。パワポを前日にしか確認できなかったため、本番まで時間がなかったので直してほしいところも一部しか指摘できませんでした。」（８C）
「どのようにしてチームビルディングを進めていくかについての意識が変わりました」（３A）
「チームビルディングの難しさを実感しました。どのように高校生をやる気にさせるのか？や、少ないミーティング時間の中でどれだけ密度の濃いことをできるかなど、深く考えるいい機会になりました！」（６A）
「直接自分が関わって研究やプロジェクト立案をするよりもチームを導いてあげることの大変さから学びを得ることができました。」（６C）

大会の結果やプレゼンテーションの質などからサポートに対して「悔い」「後悔」「力不足」等を感じている様子を伺うことができる（１C８C）。その要因として「イメージを本番当日までに確立できなかったこと」や「関わり方やアドバイスの仕方」等をあげており、スケジュール管理やサポートのあり方などについてメンターとしての責務を果たせなかったのではないかと捉えている（１C３C）。また、「世界大会へ出場できていたのかなと思うと申し訳ない」として大会で優勝等に導けなかったことで、責任を果たせなかったと捉えている様子も伺えた（４C）。一方「チームビルディングの難しさを実感」「チームを導いてあげることの大変さから学びを得る」等から支援型のリーダーシップの必要性と困難に直面しつつ、そこから自らの学びが導かれていったことが示唆される（６A６C）。

リーダーシップの評価規準は「チームをまとめリードする力がある」、責任感は「自分の行動、人との関わりにおける責任感」となっており、SAGE JAPAN の活動では、高校生に対してリーダーシップや責任感が常に求められる場になったことが伺える。責任を果たすことと自らの力量は表裏の関係にあり、高校生を指導する過程で力量の必要性を感得したり、不足したりしていたことを自覚していたとすれば、そのような内省的認識の存在は、量的分析に有意差が出なかった事実と整合性があるものといえる。

②高校生

表４に活動前後の質問紙に回答した31名の自由記述を以下に示す。A、B、C は活動後の質問項目である。

ここでは、活動前後で有意な向上が認められた「社会貢献への関心」、「責任感」、「リーダーシップ」、向上に有意傾向が認められた「発言力」、「問題解決能力」に関連する記述を取り上げる。

表 4 高校生の自由記述

	A SAGEの活動を通して身に付けたことや"自分は変わった"と思えるところがあれば書いてください。	B SAGEの活動を通して自分の進路や将来に影響したと思えるところがあれば書いてください。	C 実際にSAGEの活動を体験してみて、今それをどのように振り返りますか。自由に記述して下さい。
1	仮説を立て検証しながら、事実をもとにプランを立てていく力や、チームのリーダーとしてみんなを支える存在になり、チームのメンバーと団結で挑た。また、企業との連携の面で、大人とコミュニケーションを取る方法を知った。	持続可能な社会に向けてのビジネスプランを考案し、実践していく過程がとても自分にとって楽しかったことから将来は、社会貢献ビジネスをしていきたいと思うようになった	活動しながら、同年代の子に私たちが作成した環境問題の現状の授業動画を見てもらった後、多くの生徒が、この問題を自分ごとと化して捉えられていて、意識の変化が見られた。そのようなことなどから、課題解決の第一歩としては自分ごと化が一番のポイントだなと思う。またsagaの活動で学んだこと、経験をこれからも活かし、活動を続けていく。
2	環境に配慮した行動をするようになった	ビジネスに興味がわいた	準備がとても大変だったけど、SAGEがあったからこそたくさんの人と出会えてたくさんの体験ができたので良い経験になったと思う
3	他の人の意見をすんなりと受け入れられるようになったところ、文章力も前よりは向上したと思う。	全ての活動が影響したと思います。ですが特に、環境、ビジネスについて沢山学んだことが進路に影響すると思います。	毎日毎日残って作業していたのはとても大変で諦めたかったけど、チームのみんなと一緒に乗り越えたことで楽しさや達成感がより味わえたのでとっても素敵な活動をさせていただいたな～というふうに振り返っております
4	周りを見て行動できるようになった。	SAGEの活動を通してやりたいなと思うことを見つけられました	SAGEの活動に参加できてよかったです。
5	これはここまで、とする線引きができるようになったかなと思う。	大会に向け色んな人と関わったことで自分は知らない人と話すのが好きということが知れたし、パソコンを使っての作業も好きというのが知れた、から、そういう方に進みたいなと思うようになった。	大会のためにたくさん動いて、発表を作りあげたこと、1回人に発表してみた事は大事だったなと思う。足りないところとか分かったし。でも、講評というか、そこをもう少し聞ければもっとSAGEの活動をした意味があったのかなとか思う。正直、全てが中途半端で終わってしまったなと言うのが本音。
6	チームで動く力、社会への関心	ビジネスもっとやりたい、いろんな人に出会いたい	負けたこと、すべてがけいけん
7	責任感		とても楽しかったが、仲間との絆が深まる活動だった。
8	プロジェクトに対する姿勢	もっと学ぶべきがあるということに気づいた	色々な体験が出来て楽しかった
9	1つの社会問題に対しての解決方法とどうやって変えてくかを考えて発表する能力を向上することが出来た。	社会問題についてたくさん考えている雰囲気に惹きたいと感じた。	時間が足りなかったので最初からもっとミーティングなどをして詰めていければ良かったと感じた。
10	最後までやり通す力		
11			良い経験位なった
12	自分一人でもやりきるという力は身についたと思う。	将来はまだ決めていないので、わからない。少なくとも、経験にはなったと思う。	人選ミスった。。。と後悔している。もっと他にPCを使いこなせる人はいないのか、この学校に。
13	政治の現代の状況が分かった。		情報を集めるのが大変だった。
14	計画を立て、実行しようとすること	今も私のやりたいことが見つからないですが、この経験が将来役立つ事があれば良いなと思っています。	友達にSAGEJAPANに誘われ、参加した序盤は特に大変とは思っていませんでした。テーマを決める時、メンバーとの知識の差が激しい事が発覚し何とか同じレベルにしようと試みましたが重なる定期試験、学校の行事に熱…足りない知識を埋めるにも時間がかかります。この時私はメンバー構成は絶対にしっかり考えるべきと思いました。ですが、知識が足りない分自分流なりに試行錯誤し、考えを沢山集めてまとめて足したり引いたり、またかけて足したりしてなんとか補い完成する事ができ、苦労もありましたが満足です。
15	意見を言って、計画に沿って行動できた		グループ内での連携がうまく取れないことがあった。
16	メンバーの意見をまとめるのがとてもうまくなったと思う	自分でもこれほど仕事をこなせるのかと思ったF	大変だったけど良い思い出です ありがとうございました
17	より社会貢献活動に興味を持った。また、自分が世界に影響を与える存在になりたいという気持ちが高まった。	まだ将来のことなどは考えていませんが、今後も社会貢献活動に積極的に取り組んでいきたいと感じました。	自分達の力のみでプロジェクト完成を目指すということにとても達成感を感じました。大学生サポーターや先生方にもとても感謝しています。
18	とりあえずチャレンジする心を持てたこと	将来もっと社会的に役に立つ仕事に就きたいと思った	内容を考えるのは大変だったが、とりあえず楽しんで取り組むことができた。
19	1つの問題解決のために半年間も時間やお金をかけたことはなかったため、ひとつの事に集中してやり切ることは初めての体験でした。	環境問題について深く学べたので、その分野にも興味を持ちました。	本当に大変な活動でしたが、その分、何か一つでも上手くいくと小さなことでもすごく達成感と喜びを感じました。貴重な経験であったと改めて思います。
20	社会課題を考えるだけではなくて、その解決のために色々な課題を見つけたり、方法を模索する力が身についた。	やはり社会問題や環境のためになる仕事をしたいと思えるようになった	大変なことも多かったけれど、それ以上に得たものが沢山あると思うので参加して良かったとすごく思います。
21	責任感を少し持てるようになった	社会学部に入ったような気持ちがした	楽しかったです。ズームでしたが大学生サポーターの方々の優しくて暖かい雰囲気が伝わってきてとても進めやすかったです。メンバーのみんなとも楽しく活動でき、最終的に準優勝をとれて大満足でした。
22	ひとつの問題に対して深く考える力が身に付いた	ビニール傘の商品制作を通して、環境に配慮した商品を売ってみたいと思った	活動を始めた当初はなかなか考えがまとまらず怖気付いていたようなところがあったけど、メンバーと考えを固めていくうちに色々なことに挑戦できるようになった。自分の将来や様々な問題について考えるきっかけにもなった。
23	思い付いた意見をその場で伝えること	活動を通して世界の問題を解決していく必要性が身に付いた	もう少し事前の準備を整え素早く次の段階に進みたかった
24	先を見通して行動すること		中々プロジェクトの方向性が定まらなかったり、企業とのコンタクトが取れなかったりと大変なことも多かったけれど、乗えた時にそれを超える達成感や成長を感じられた。
25	ジェンダーについて深く理解することで認識が変わった		軽い気持ちで始めたことが、ここまで自分を変えることにつながると思っていなかった。本当に参加して良かったと思う。
26	アバウトなんですけど今回私はLGBTQ +についてのプロジェクトと進めてきて自分の関わりのない世界に触れることができました。性的マイノリティの方々を示す用語をはじめ自分が知らないことが多いと実感しました。でも活動を通してLGBTQの本質的な問題について考え当時者の方々から話を聞けてなんていうかすごく心に残りました		テストとか大会とかとミーティングがかぶったりした時は本当に大変だったけど、大人の社会の一員として少しでも活動できかなと思いました。たくさんのこと勉強できました。高校生のうちにこのような体験をできて本当によかったと思いました。
27	他人の意見をきちんと聞く		たのしく、社会のことについても学べたと思います
28	計画通りに物事を進めていく力がついたと思う。また、グループで活動を行うことで周りの人の意見を取り入れられるようになったと感じる。	SDGsには元々興味があったので、将来的にも社会問題について学んでいきたいと思えるようになった。	自分たちの活動は学校や生徒のためなったと思うので、良い活動ができたと思う。
29	積極的に意見が言えるようになったと思う。	人にSDGsについて広めることができると思う	最初は課題の解決策を探すのが難しかったが一つ一つ問題をチームで潰すことができて良かったと思う。
30	社会問題に対しての向き合い方。視野を広げることができた。	これまでは社会問題を解決するにあたって、壮大なことを考えてしまっていたが、まずは小さいことから始めることが重要だとわかったので、これからも自分のプロジェクトに加え、その他の社会問題へも取り組んで行きたいと思った。	大変なこともちろんあったが、様々な方のサポートのもとプロジェクトを進めることができたので、よかった。これを機に、社会問題に詳しくなり、それらを身近な問題として捉えることができるようになった。
31	意見を以前よりも積極的に出せるようになり、意見の衝突があっても上手く解決することができるようになった。		半年もの時間をかけて取り組むプロジェクトは初めてだったのでとても良い経験になりました。

＊下線は引用した記述

a)「社会貢献への関心」に関する記述から

「活動しながら、同年代の子に私たちが作成した環境問題の現状の授業動画を見てもらった後、多くの生徒が、この問題を自分ごと化して捉えられていて、意識の変化が見られた。そのようなことなどから、課題解決の第一歩としては自分ごと化が一番のポイントだなと思う。またSAGEの活動で学んだこと、経験をこれからも活かし、活動を続けていく。」(１C)
「持続可能な社会に向けてのビジネスプランを考案し、実践していく過程がとても自分にとって楽しかったことから将来は社会貢献ビジネスをしていきたいと思うようになった」(１B)
「特に，環境、ビジネスについて沢山学んだことが進路に影響すると思います。」(３B)
「社会問題についてたくさん考えている職業に就きたいと感じた。」(９B)

同年代に対して環境問題への啓蒙活動を行い、相手が変容することで、社会貢献への関心が高まったことを伺うことができた（１C)。また、社会貢献の活動の「考案、実践していく過程」が楽しかったとして、楽しいと捉えられる経験が継続的な意欲となったことが述べられている（１B)。さらに、「将来は社会貢献のビジネスをしていきたいと思う」「進路に影響する」などの記述からはSAGE JAPANの経験が進路や将来に影響を与える機会になったことが示唆された（３B、９B)。

「社会貢献への関心」の評価規準である「社会問題に対して貢献しよう、またしたいという意欲」は、社会的課題について互いに伝え合うという活動やプロジェクト遂行の過程における楽しさによって高まっていったものと考えられる。

b)「責任感」に関する記述から

「毎日毎日残って作業していたのはとても大変で辞めたかったけど、チームのみんなと一緒に乗り越えたことで楽しさや達成感がより味わえたのでとっても素敵な活動をさせていただいたな～というふうに振り返っております。」(３C)
「テストとか大会とかとミーティングがかぶったりした時は本当に大変だったけど、大人の社会の一員として少しでも活動できかなと思いました。たくさんのこと勉強できました。高校生のうちにこのような体験をできて本当によかったと思いました。」(26C)

「毎日毎日残って作業」から活動の苦労の一端が示されている。チームで取り組んでいることから他のメンバーへの責任を担っており、その責任をチームワークで乗り越えることで責任を果たすことができたととらえるようになったことが示唆される（３C)。また責任を問われる場面として「大人の社会の一員」としての活動を行ったことや環境におかれたことがあげられている（26C)。

責任感の評価規準である「自分の行動、人との関わりにおける責任感」は大人社会で求められるようなプロジェクトをチームとして遂行したり、そこでの障壁を乗り越えていく過程で培われ、量的分析における有意差にあらわれたものと考えられる。

c)「リーダーシップ」に関する記述から

「仮説を立て検証しながら、事実をもとにプランを立てていく力や、チームのリーダーとしてみんなを支える存在になり、チームのメンバーと団結できた。」(１A)
「テーマを決める時、メンバーとの知識の差が激しい事が発覚し何とか同じレベルにしようと試みましたが重なる定期試験、学校の宿題に塾…足りない知識を埋めるにも時間がか

かります。この時私はメンバー構成は絶対にしっかり考えるべきと思いました。ですが、知識が足りない分自分達なりに試行錯誤し、考えを沢山集めてまとめて足したり引いたり、またかけて足したりしてなんとか補い完成する事ができ、苦労もありましたが満足です。」(14C)

「みんなを支える存在」として「チームのメンバーと団結できた」との記述からはリーダーの立場であった生徒が支援型のリーダーシップを発揮しながらその力量を身につけていったことを示唆される（１A)。また、調整が求められた場面としてメンバー間の知識の差をあげている。知識の差を埋めるべく、「自分たちなりに試行錯誤し」補い合ったことで、完成という成果をつかんだと述べられている（14C)。これを相互にリーダーシップを発揮したととらえるならば、リーダーシップの評価規準である「チームをまとめリードする力がある」の有意な向上という事実と符合するといえなくもない。

d)「発言力」「問題解決能力」に関する記述から

「１つの社会問題に対しての解決方法とどうやって変えてくかを考えて発表する能力を向上することが出来た。」(９A)
「仮説を立て検証しながら、事実をもとにプランを立てていく力や、チームのリーダーとしてみんなを支える存在になり、チームのメンバーと団結できた。」(１A 前出)
「社会課題を考えるだけではなくて、その解決のために色々な課題を見つけたり、方法を模索する力が身についた。」(20A)
「自分達の力のみでプロジェクト完成を目指すということにとても達成感を感じました。大学生サポーターや先生方にもとても感謝しています。」(17C)
「楽しかったです。ズームでしたが大学生サポーターの方々の優しくて暖かい雰囲気が伝わってきてとても進めやすかったです。」(21C)
「最初は課題の解決策を探すのが難しかったが一つ一つ問題をチームで潰すことができて良かったと思う。」(29C)

「考えて発表する能力」が向上したとする記述からは、考える機会や活動途上での意見を述べる機会、また大会での発表の機会が発言力の向上に寄与したものと考えられる（９A)。「仮説を立てて検証しながら、事実をもとにプランを立てていく力」「解決のために色々な課題を見つけたり、方法を模索する力」「問題をチームで潰すことができ」等の記述には、活動が問題解決の機会となっていたことが表出されており、問題解決能力の評価規準にある「物事に問題意識を持ち、その解決に向けて行動できる」力が実際に身に付いたととらえていることが示唆される（１A20A29C)。また、プロジェクトの完成に至る過程では、大学生サポーター等の支援が有益であったことが伺えた（17C21C)。

（宮崎　猛）

Ⅳ　おわりに

本研究では、サービス・ラーニングとアントレプレナーシップ教育を取り入れた高大連携プログラムとしてSAGE JAPANを取り上げ、参加した高校生ならびにその活動を支援する大学生サポーターの教育効果について検証した。その結果、以下の知見が得られた。

⑴　「社会貢献への関心」、「発言力」：大学生、高校生共に有意な向上が得られた

「社会貢献への関心」は、高校生の記述からその意義について互いに伝え合うという活動によって高まっていったことが明らかになった。また楽しい経験としての活動も重要であり、それが関心の高まりにも寄与している。「発言力」については、大学生は高校生のメンターとして、多くの発言の機会をもつことになり、また高校生に分かるように説明するなどの必要性から発言力が向上したととらえられていた。高校生は大会での発表やプロジェクト遂行過程でのチーム内の意見調整などの機会を通して発言力が向上していったことが明らかになった。

⑵　「協調性」：大学生に有意な向上が得られた

高校生の自律性を支援しながらプロジェクトを完遂に導くという、メンターの役割を大学生が果たす過程で協調性が身に付いたと捉えていたことが示唆された。

⑶　「責任感」、「リーダーシップ」、「問題解決能力」：高校生に有意な向上が得られた

チームメンバーそれぞれが異なった関心や個人間の能力の差異（知識の差等）を補い合い、協働してプロジェクトを完成させることで「責任感」、「リーダーシップ」、「問題解決能力」等の能力が育まれ、自己実現という実感がもたらされていた。

⑷　「チャレンジ精神」、「向上心」、「社会問題への関心」、「創造力」：大学生、高校生共に有意な向上が得られなかった

量的データならびに質的データから、その理由を探ることはできなかった。有意な向上が得られなかった項目は「創造力」を除いて情意面（メンタル面）に分類された項目である。SAGE JAPAN は希望者が自主的に参加するプログラムであることから、社会貢献活動に対する意欲が高い参加者が集うコミュニティであり、特に情意面（メンタル面）については、活動前後の有意差が現れにくい評価規準ではないかと推測される。

⑸　「責任感」、「リーダーシップ」、「問題解決能力」：大学生で有意な向上が得られなかった

大学生サポーターはサポートする過程で常に「責任感」、「リーダーシップ」、「問題解決能力」を発揮する場面や機会があり、そうした機会に直面することでそれらが不足していたり、不十分であると内省していた状況が明らかになった。

⑹　「協調性」：高校生で有意な向上が得られなかった

量的な分析から直接関連する記述を見出すことはできなかった。一方で上記⑸の検討や全体の記述を通して浮かび上がってくる事実として、大学生における「責任感」同様にチームの中で一つのプロジェクトを完遂する過程での様々な葛藤によって、協調性の必要性を感得するきっかけになったのではないかと推測することができる。

本研究で明らかになった上述の事項を総合的にとらえると、第一に社会貢献プロジェクトに主体的かつ積極的に関わることで社会人基礎力に関連した能力を身につけたとの自己認識がなされたということである。それは「社会貢献への関心」、「発言力」（高校生、大学生）、「協調性」（大学生）、「責任感」、「リーダーシップ」、「問題解決能力」（高校生）で確認することができた。第二は、高校生と大学生で異なった結果となった規準があったことである。具体的には、「責任感」「リーダーシップ」は、高校生では活動前後の有意な向上がみられたものの、大学生では向上はみられたが有意差までは出ないという結果になった。要因は、プロジェクトにおける高校生、大学生の役割が異なり、それぞれの役割を果たす過程で、それに必要な能力の必要性を強く感得したり、不足を内省したものと考えられた。普段の学校、大学での生活や学習には求められない場がこの活動で提供されたものともいえよう。第三に、第一と第二に関連して、チームでの活動、現実社会に影響を与えるプロジェクト、異校種間（高校生と大学生）の協働の三つが学びの重要な要素になっていたということである。

最後に本研究の課題と限界について述べる。本研究では量的分析ではわからない活動における事象の状況を知るために質的分析を用いた。質的なデータ（特に高校生）には様々な学びの姿が示されていたが本研究ではそれを取り上げることはできなかった。また、本研究での調査は自己認識を調査したものであることから実際に身に付いたかどうかを検証するものではない。本研究の限界は、一つの事例のなかで少ない標本数に基づいて行われたものであり、高校生や大学生のアントレプレナー教育の効果として一般化することはできないことである。
本研究は上述のような課題や限界があるものの、今日多様な形で奨励されているアントレプレナー教育や高大連携の実例を示したものである。本研究がその実践とともに今後の同種の教育や実践において参照されることを期待したい。

（宮崎猛、桐山信一）

引用文献

1 宮崎猛「アメリカにおける『サービスラーニング』の動向と意義」『日本社会科教育学会社会科教育研究』第80号、1998年、33-39頁。

2 Andrew Furco.(1996) Service Learning : A Balanced Approach to Experiential Education. Expanding Boundaries: Service and Learning. Corporation for National Service, pp. 2-6.

3 Miyazaki Takeshi (2013) The Effectiveness of Service Learning Practice for Teacher Education in Japan: For the Support of a New Subject Called, Houshi, for a High School in Tokyo. Journal of International Social Studies, 2 (2), 91-99.

4 内閣府『平成26年度版　子ども・若者の状況及ひ 子ども・若者育成支援施策の実施状況』2014年、p30頁。

5 SAGE Global Information Handbook 2018-2019；http://www.sageglobal.org/wp-content/uploads/2018/10/SAGE-Handbook-2018-2019.pdf#search=%27SAGE+Global+Information+Handbook%27

6 経済産業省 『平成17年度版　新規事業発展基盤調査　起業家教育の実施状況及び普及・定着に関する調査報告書』2005年、p 8

7 上西好悦『キャリア教育を支えるアントレプレナー教育』日本標準、2006年、p25

8 川名和美「我が国の起業家教育の意義と課題―「起業教育」と「起業家学習」のための「地域つなかりつくり」『日本政策金融公庫論集 第25号』日本政策金融公庫研究所、2014年、p 61

9 Battisoni, R. M. (2013). Civic learning through service learning: Conceptual frameworks and research. In P.H.Clayton, R.G. Bringle, & J.A. Hatcher (Eds.), Research on service learning: Conceptual frameworks and assessment (pp. 111-132). Sterling, VA: Stylus.

10 Boyte, H. (2008). Against the current: Developing the civic agency of students. Change: the Magazine of Higher Learning, 40(3), 8 -15.

11 Root, S., & Anderson, J.B.. (2010). Service-learning in teacher education: An overview of the research. In J. Kielsmeier & S. Root (Eds.). Growing to Greatness 2010 (pp. 23-32). St. Paul, MN: National Youth Leadership Council.

12 Miyazaki,T., Anderson, J.B., Jones, S. (2017) The Influence of Service-Learning on the Civic Attitudes and Skills of Japanese Teacher Education Candidates. International Journal of Research on Service Learning in Teacher Education Vol. 5 (2017), 1-10.

13　Moely, B. E., Mercer, S. H., Illustre, V., Miron, D., & McFarland, M. (2002). Psychometric proper-ties and correlates of the civic attitudes and skills questionnaire (CASQ): A measure of students' attitudes related to service-learning. Michigan Journal of Community Service Learning. Spring, 15-26.
14　経済産業省『人生100年時代の社会人基礎力について』2018年

付記

本研究は、創価大学人を対象とする研究倫理委員会の承認（承認番号2020050）を得ている。
本研究は、JSPS 科研費 JP17K04884の助成を受けた。

High School and University Students' Partnership Program
Incorporating Service-Learning and Entrepreneurship Education
-Educational Effects of Social Contribution Projects
in the SAGE JAPAN Program-

Takeshi MIYAZAKI Soka University, Nobukazu KIRIYAMA Soka University

This study examined the educational effects of SAGE JAPAN, a high school-university cooperative program that incorporates service-learning and entrepreneurship education, on the participating high school and university student supporters who assisted them in their activities. As a result, firstly, the self-perception of the participants was that they had acquired abilities similar the professional ones mentioned by the Ministry of Economy, Trade and Industry. Not all students, however, reacted in the same way. "Cooperativeness" stimulated university students mostly, whereas "sense of responsibility," "leadership," and "problem-solving skills" mainly piqued high school students. "Interest in social contribution" and "ability to speak up" produced results in both groups. Secondly, there were some criteria that gave different results for high school and university students. Specifically, "sense of responsibility" and "leadership", there was a significant improvement before and after the activity, but in college students, there was a improvement, but no significance.
"Cooperativeness" showed significant improvements in university students, but not in high school students. The reason for this was that the roles of the high school and university students in the project were different, and in the process of fulfilling their respective roles, they faced situations and opportunities that required them to have the necessary skills. This made them feel the need to acquire and hone such skills, or reflect on their absence or scarcity. The limitation of this study is that it was conducted based on a small sample size in a single case and cannot be generalized as an effect of entrepreneurship education for high school and university students.

Keywords: Service-Learning, Entrepreneurial Education, High School and University Collaboration, Social Contribution Project, Problem-Based Learning